抜刷
『華南研究』(ISSN 2188-4846)
(日本華南学会)
第1号(2013年度)2014年4月発行

【論　説】Article

章炳麟と清末における「南」言説

Zhang Taiyan and the Late Qing Discourse on "South China"

林　少陽

LIN Shaoyang

The Journal of South China Studies
The Japan Association of South China Studies
ISSN 2188-4846, No.1, published in April 2014

【論　説】

章炳麟と清末における「南」言説

林 少陽

はじめに

――辛亥革命における「革命」の「南」と「改良」の「北」

清末における変革勢力を南方の革命派と北方の立憲派に分けるのは、一般的である。例えば、村田雄二郎は、章炳麟（1869－1936、字は枚叔、号は太炎）を前者の代表とし、その国家論は「中国南部における農耕的、園芸的文化」を背景とした。それに対して、楊度（1875-1931）、梁啓超（1873-1929）を代表とする立憲派は、中国北部における「遊牧的、牧畜的文化」を背景とした[1]。村田は、清朝皇帝が退位し共和国家が実現した点においては、南方＝革命派が勝利したと言えるが、多民族型複合国家を継承した点においては、北方＝立憲派の目標が実現されたとする。かくして辛亥革命は南北という二大異質文化の対立と競争によって特徴付けられる、と村田は指摘する[2]。村田は南方の革命派について、その出身地によって分けられていた浙江派、湖南派、広東派を三派の内部構成と主張の違いによって分けた。個々人の革命道徳を基礎とする浙江派（章炳麟によって代表される光復会）、一省自治を求めようとする湖南派（黄興［1874-1916］によって代表される華興会）、一国革命を方略とする広東派（孫文［1866-1925］が代表）、として捉えた。[3]この分け方から見えるのは、革命派の南方的色彩である。

光緒 29 年（1903）の論文において、梁啟超は章炳麟の革命主張を「復讐主義」と批判

---

[1] 村田雄二郎「辛亥革命在中国歴史上的地位」、『読書』雑誌、北京：三聯書店、2011 年 8 月号、106 頁。

[2] 同上。

[3] 村田雄二郎「解説」、村田雄二郎編『新編・原典中国近代思想史・3・民族と国家』東京：岩波書店、2010 年 6 月、9-13 頁。

した[4]。梁はドイツの政治理論家ブルンチュリー（Johann Kaspar Bluntschli, 1808-1881）における「同地、同血統、同面貌、同語言、同文字、同宗教、同風俗、同生計」の結合体を「民族」と定義し，それを章炳麟の民族主義と同一させ、さらにそれを「小民族主義」と定義した。それに対して、「民族連合」や「民族融合」を主張することを「大民族主義」とし、「漢、滿、蒙、回、苗、藏（チベット）を合して一大民族を組む」と主張した[5]。梁啟超の「大民族主義」の目的は、均質的な国民に基づく新しい国民国家を立ち上げようとすることだ、と言える。この点も梁が熱心に紹介しようとしたブルンチュリーの学説にも見られている。「十八世紀以來の学者は、国民を社会とし，国家を人の積もるものにして成し、恰もアトムが集まるのを以って物質となるが如し」と梁啓超はルンチュリーを紹介した[6]。梁は漢民族がほかの民族との共存を考えようとしたが、民族間の差異と、この差異によってもたらされた政治的な対立と抑圧を意図的に無視しようとしたようである。この意味において梁の主張は、一種の柔軟性のある、改良に適した「民族主義」と言える。

本論において説明しようとするのは、次のことである。まず清末における「南方」言説が明末清初の「南方」言説の系譜内にあるが、実際戊戌変法失敗後の政治変動の直接の結果であることを確認する。次に、章炳麟の政治的実践とその学術、政治批評は、清末民初において氾濫する「南方」言説に大きな影響を与えたことを確認する。さらに、ここから章炳麟と辛亥革命の若い世代との交流と断絶を説明しようとすることである。

Ⅰ　章炳麟の「南方」

(1) 章炳麟の「南方」、革命と南明史

清末において章炳麟は革命宣伝のために率先して明が亡ぼされた歴史、特に明末における清朝支配に対する反抗の歴史（いわゆる「南明史」）に頻繁に言及するようになった。「南方」言説が頻出された背景には、明末の反清の歴史を清末の政治的資源として再利用しようとしたことがある。南明とは、清朝政権が北京に入ってから明の宗室が南で立てた抵抗王朝のことを指している。朱維錚によれば、章炳麟が 1661 年に桂王政権が清軍に攻滅されたことを屈辱として捉えたので、その『訄書』初稿が完成された年を明が亡びた「辛丑」（1661 年）後の「第二百三十八年」（1899 年）とした。[7]章炳麟が南明史にこだわっていることは、ここからも見える。

---

[4] 梁啓超「政治学大家伯倫知理之学說」、『飲冰室文集』之十三、『飲冰室合集』第二卷所收、北京：中華書局，003 年、75 頁。

[5] 同上、75-76 頁。

[6] 同上、70 頁。

[7] 『章太炎全集』第 3 卷、朱維錚「前言」、上海人民出版社、1984 年、4 頁。

1899 年と言えば、すでに戊戌変法が失敗された時であり、章炳麟がもはや改良を当てにしない時期でもある。章炳麟の南明史言説は、彼の政治的態度の変化と直結している。そもそも章炳麟の改良に対する思いは、一時期的な政治選択、政治判断にすぎないかもしれない。たとえば、章は自伝において戊戌変法が失敗する前の 1897 年（光緒 23 年，丁酉）春において、梁啓超から孫文が「志を蓄えて満州政府を顛覆しようとしたい」ことでロンドンで清朝大使館に不法逮捕されたことを聞いて、章は高い敬意を抱いたことを述べた（「口授少年事跡」）[8]。これは章が初めて孫文の存在を聞いた時でもあったる。後年章炳麟は『時務報』時代、孫文の満州政権打倒の主張を聞いて、「ひそかに我が志が孤りでないことを幸いに思った」が、「なお（康有為）の妄語に魅了せずにいられなかった」と回顧した[9]。ここからも章炳麟の過去の改良支持は、一種の一時的で便宜的な政治選擇に過ぎないことがわかる。この点について、後年章炳麟が清朝政権を公然と批判した「『蘇報』事件」で逮捕された後に、1903 年 7 月 6 日の『蘇報』の「獄中答新聞報」において「昔は間接的な革命であり、今は直接的な革命である」と述べている[10]。彼はかつて改良に対する期待を「間接的な革命」と見て、「『蘇報』事件」によって代表される彼の反抗を「直接的な革命」と見たわけである。

章炳麟の南明の遺民史叙述は、まさに彼の言う「直接的な革命」の表れである。章は 1906 年 9 月に「『南疆逸史』序」において次のように述べている。

> 明の史は、万季野によって之を述べられた。季野は東南の獻民なるため、その義が北面にないが、虜と漢の間に局促しながら、懐を自から遂げることができなかった。彼が述べた『明史』とは、思宗のころまでであり、聖安以降の三葉二十年の紀伝は悉く具えていない。承祚の法を援すならば、『後明史』はすなわち作らざるべからず。温睿臨なる者は、季野と京邸に同居し、官書の醜さを憤った。これを正して『綏寇紀略』等四十餘種を集めたのは、『南疆逸史』である。[11]

万季野とはすなわち清の大学者である万斯同（1638-1702）のことであり、清末明初の碩学黄宗羲（1610-1695，黄梨洲）の弟子でもある。その師と同じように、万斯同は清に出仕することを拒絶し、ただ庶民の身分で明史館に勤めた。『明史』500 巻は彼によって定められた。『明史』は明の亡国の崇禎皇帝朱由檢（1610－1644、思宗はおくり名）までであり、崇禎皇帝

---

[8] 朱希祖「本師章太炎口授少年事蹟筆記」、『制言』半月刊（章氏国学講習所編印）、第 25 期「太炎先生幾年專號」、1936 年 9 月 16 日、2 頁。

[9] 章炳麟「致陶亞魂柳亞盧書」にも見られている。湯志鈞編『章太炎政論選集』上冊，191 頁。湯志鈞『章太炎年譜長編：1868-1918』上、39-40 頁。

[10] 湯志鈞編『章太炎政論選集』上、233 頁。

[11]「『南疆逸史』序」、『太炎文録初編·文録二』所收、『章氏叢書』、浙江圖書館版、1919 年、63 頁。

が自殺した1644年から清朝が台湾を占領するころまでの19年間は記録されていない。上の引用にある「承祚」とは、西晋の大歴史家陳寿（233-297）のことである。晋は東呉を亡ぼした280年に、分裂の局面を終え、陳寿は『三国志』を書き始めた。万氏に対して、章炳麟は高い敬意を抱いた。ここで章炳麟が万斯同を「東南の獻民」と見たが、獻民とは遺民の意味である。ここで「南方」も「遺民」というアイデンティティの異なる表現と言ってもよい。

「『南疆逸史』序」において章炳麟が「余は昔季明の事狀を蒐集し、『後明史』を作ることを以て万氏を継ごうとした」と回顧した通りである[12]。つまり章炳麟は陳寿に倣って、万斯同の『後明史』の書けなかった部分を書こうとしたわけである。『南疆逸史』はまさに章炳麟から別の種類の南明史として見たわけである。

『南疆逸史』（『南疆佚史』）とは、紀伝体南明史である。その作者は康熙乙酉（1705）年間の挙人（科挙試験での郷試合格者）、浙江省出身の溫睿臨（字は鄰翼）である。万氏と溫睿臨は親友であることは章炳麟の上の「序」において言及されている。本書は約く康熙年間後期（1702-1722）に完成されたが、南明紀年以来の抗清資料がたくさん蒐集されたため、清政権の下においては正式な刊行はなく写本として流伝されていた[13]。溫睿臨はその「序」の書き出しにおいて「南疆逸史なる者は何ぞや。南明弘光、隆武、永曆の三朝遺事を記すことである。何故朝と言わなかったのか？朝として成り得なかったからである。何故これを南疆と謂うのか。皆南士であり、その勢は北に及べなかったからである。」と[14]。弘光帝とは、南明朱由崧（1607－1646）が1644年から1645年まで抵抗していた時期であり、隆武とは南明紹宗朱聿鍵が1645年閏6月から1646年8月まで在位していた時期を指す。そして永曆とは、桂王朱由榔の年号として1646年8月から永曆16年の1662年に朱由榔が昆明で呉三桂に殺された時期までを指している。のちに台湾を占拠しながら抗清していた鄭成功（1624-1662）政権によって永曆という年号がずっと継承された。永曆という年号はずっと鄭克塽（1670-1707）が清に降参し、台湾が清によって占領された1683年まで続いていた。溫睿臨にとってこの「南」とは無論明朝、漢族政権の隠喩でもあり、「北」とはもちろん満清の政権の隠喩となる。

「南方」とは、章炳麟において、反抗の隠喩であると同時に、それを弾圧した満州族政権に対する反抗の隠喩でもある。この点について章炳麟はその「討滿洲檄」において、南方の反抗に対して満州族政権が果たした江蘇の揚州・嘉定・江陰の虐殺、浙江の嘉興・金華の虐殺、広東の広州の虐殺などを列挙した[15]。清初における清朝政権による南方士人とりわけ東南士人に対する弾圧は、清朝の文脈における「南」「北」という言葉に強い政治的な色合いを

---

[12] 同上、63頁。

[13] 以上の『南疆逸史』についての情況は、溫睿臨『南疆逸史』上冊、上海圖書館「前言」、上海：中華書局上海編輯所、1959年、1-2頁、による。

[14] 同上、1頁。

[15]『章太炎全集』第4巻，上海人民出版社、1985年、191頁。

持たせるようになった。かくして、「南方」という滿清政権の弾圧の記憶は、章炳麟の反清種族革命において再び発動され、「南」とは、同時に、北にある朝廷に対する反抗の装置と隠喩として流通されたわけである。

（２）章炳麟の小学研究における「南方」

ここで指摘しておくべきなのは、章炳麟にとっての「南方」とは、政治的なものだけでなく、学術的なものでもある。これは彼の方言、とりわけ南方方言と漢字との関係についての研究からも窺える。現在の北方方言は「今音」、すなわち元明以來の音韻に属している。閩南語（福建南部の方言）、広東語、客家語などの華南方言は、「中古音」（紀元 581 年から 1278 年まで、すなわち隋から宋までの語音[16]）以来の音韻に近いので、「上古音」に遡る言語材料として意味がある。上古音とは、『詩経』によって代表される周や秦、漢代の漢字音系統である[17]。これらの方言に対する研究は音韻的価値を有しているのみならず、訓詁学的価値をも有しているので、上古音の研究は古典の解読に直結している。この点について日本亡命後の章炳麟が１９０８年に『民報』において「中国の方言は古より伝承され、其の中に古文古義が多く含まれている」と述べている通りである。[18]章炳麟の『新方言』（1908 年）はこの関心の成果である。『新方言』序において、章炳麟は、清朝の戴震（1723－1777）、段玉裁（1735－1815）、王念孫（1744－1832）、郝懿行（1757-1825）以降の音韻的な視点による文字学の成果と文献解読への貢献を讃えながら、「今の世の方言」を文字学の重要な材料だと言うことを知らないのは大きな欠点だと指摘した[19]。口語の方言を伝統的な小学（漢字学）と古典文献学の材料として見ること自体は、章炳麟における近代言語学の影響と伝統的な言語学を結合していることが窺えている。

章炳麟の方言研究の方法論は、具体的には戴震の小学方法論における「音転」理論を斬新的に方言研究と結び付けることであると言える。章炳麟は『新方言』「序」において戴震の軼書『転語二十章転語』の「序」を大幅に引用している。戴震はこの「序」において、「義において疑う者が声を以てこれを求め、声において疑う者が義を以てこれを正すことを俾したい」と述べている[20]。『新方言』の序において戴震のこれを引用したのは、章炳麟がその方法論について紹介しているからである。これはもちろん清朝小学研究において主流となっておいる音韻学的方法である。そして章炳麟が応用したのも、戴震の「転語」という原理である。戴震の「転語」研究とは、主に漢字の生制原理六つの方法である「六書」におけ

---

[16] 李新魁『中古音』北京：商務印書館，1991 年，1 頁。

[17] 唐作藩編『上古音手冊』南京：江蘇人民出版社，1982 年，1 頁。

[18] 章炳麟〈博征海内方言告白〉、『民報』第 21 号。『中国近代期刊資料彙刊・第二輯・民報』第 5 巻、中華書局影印版、2006 年、3409 頁。

[19]『章太炎全集』第 7 巻、上海人民出版社、1999 年、3 頁。

[20]『東原文集』第 4 巻収録、『戴震全書』第 6 巻、合肥：黄山書社、1994 年、305 頁。

る仮借（転注も実も含んで）における「音が近ければ義が同じである」という現象を注目し、意味が同じで音声的にもある程度の類似性を持っている字はほかならず語彙が音声的に変化した結果にすぎないと戴震が見た[21]。戴震は『転語二十章転語』「序」において例を挙げながら次のように述べた。

「爾」、「女」、「而」、「戎」、「若」とは、人を謂う詞である。しかし「如」「若」、「然」は、義においてまた交通がある（中略）。『周語』（『国語』に収められた『周語』）の「若能有濟也」を注して「若、乃也」と云う。『檀弓』（戦国檀弓の『檀弓篇』）「如曰然」を注して「而、乃也」と云う。『魯論』（『魯論語』）「吾未如之何」は、即ち「奈之何」である。鄭康成（漢の鄭玄）は「如」を「那」と読む[22]。

戴震は「序」において「六書は声によって事を托し、仮借して相ひ禅ける」という原理「二十章」と分け、以て「それぞれ其の声に従い、以て其の義に原る。」とした。すなわち、声が近ければその意味も同じあるはずだという原理に基づきながら、字の本義に遡ろうとする、という方法である。章炳麟が『新方言』序文において戴震を引用したのは、章炳麟の方言研究が戴震の「転語」原理を方言研究に応用したことであり、前人ができなかった斬新な方言研究ができるようになったからである。この新しさは『新方言』のタイトルによって示された通りである。この点について章門弟子の沈兼士（1887－1947）は次のように解釈した。沈兼士は、

（章炳麟は）今語と古語は、その質がもとより同じである。今では筆札や常文が解釈できない口語は、ただ音声に変化があったにすぎないからである。それをもし古今音韻通転の定律で推定するならば、それらの口語の語彙はみな『爾雅』や『說文解字』などからその本字を求めることができる。これは揚雄の『方言』と比較するならば、『方言』はただ同訓の語彙を並べるのみで本字を弁えるまでは徹底しなかった。ほかの諸家はいっそう論じことはなかった。

と述べた。[23]

戴震がここで言っている「爾」、「女」、「而」、「戎」、「若」、「如」、「然」とは、北方方言を標準語とする近代中国語の発音ではその初めの子音（頭子音）がないか（「爾」、「女」、「而」）、または頭子音が捲舌音の[r-]である（戎[róng]、若[ruò]、如[rú]、然

---

[21] 曹述敬主編・謝紀鋒副主編『音韻学辞典』長沙：湖南出版社、1991 年、322 頁（「転語」項目）。

[22] 『戴震全書』第 6 巻，305 頁。括弧の中は引用者による。

[23] 沈兼士「今後研究方言之新趨勢」（1923）、『沈兼士学術論文選』所收、北京：中華書局、2004 年、44-45 頁。

[rán]）。しかし、章炳麟がその『国故論衡』に収録された「古音娘日二紐歸泥說」において「娘、日という二つの字の最初の子音は，古において並びに「泥」に帰される」、という著名な論断を提起した。これは章炳麟の古代音韻研究の有名な貢献である。今人の中国語常識では、「娘」の頭子音を「泥」に帰したのはごく自然であり、古今において大きな変化がないからである。しかし「日」（現代中国語標準語音[rì]）の頭子音を「泥」にするのは、理解しにい。上古音の擬音を調べてみれば、「娘」は[niaŋ]であり[24]、「日」を[ȵiet]（李・周190頁）または[ȵiět][25]であり、「泥」は[niei]（李・周120、郭129頁）となる。「日」の現代中国語の方言での発音を調べてみれば、贛語、客家話では同時に[ȵit]或[ngit7]であり、上古音とほぼ同じであるが、福建省東部の閩東話では[nih]であり（李・周190頁）、上古の頭子音を保存しながら上古入声音を失った（入声音とは古漢語の声調の一つで韻尾に-p、-t、-kを持つもの）。方言がある程度古漢語の化石として機能していることはここから窺える。ついでながら、中古漢字音を記録した日本語の「日本」[nippon]という発音も、章炳麟の見解の正しさを証明できるものである。

戴震の上述例子に戻れば、「爾」、「女」、「而」、「戎」、「若」という四文字において、「爾」（現代中国語標準語[ěr]）の上古擬音は[ȵiei]であり（郭97頁、李・周57頁）、客家語では[ȵi]となる。「女」（北方方言をベースとした現代中国語標準語では[nǚ]）の上古擬音は[nǐa]であり（郭161頁、李・周50頁），今比の北方方言の発音と頭子音の変化はないのでここで略すことにする。「而」（現代中国語標準語[rú]）については、その上古擬音は[ȵiə]であり（郭97頁、李・周50頁）、現代漢語の方言ではそのまま古代の頭子音を保っているものは見られない（李・周50頁）。「戎」（現代中国語標準語[róng]）は、上古音では[ȵiuŋ]（李・周6頁）または[ȵiwəm]であるが（郭450頁）、現代漢語の方言ではこの頭子音を持っている発音の方言が見当たらない[26]。「若」（現代中国語標準語[ruò]）の上古擬音に[ȵia]（李・周317頁）、[ȵiak]という二つの擬音が見られ（郭48頁、李・周347頁）、今日の閩東語では[nuɔk]である（李・周347頁）。「若」の古音は、閩東語のほか、もちろん形声字「諾」の北方音[nuò]からも窺えるので、「諾」は明らかに古音を保っている。

他方、章炳麟が方言の研究を始めたのは、単に学問的な動機ではない。同時に彼の政治的課題にも関わるのでもある。章炳麟は、『新方言』「序」において、「世人は欧羅巴語を習う際に多く其の語根を尋ね、これを希臘、ラテンに遡るが、今は国語に於いて本始を推し見ようとしない。これを顧みるに、此はなお冠帶の倫と齧（かぶ）えるに足らぬとすれば、何

---

[24] 李珍華・周長楫『漢字古今音表』（改訂版）北京：中華書局、1999年，322頁、以下は「李・周、X頁」で示す。

[25] 郭錫良編著『漢字古音手冊』（改訂版）北京：商務印書館、2011年、92頁。以下は「郭、X頁」で示す。

[26] 李珍華・周長楫『漢字古今音表』（改訂本）、6頁。

が学を問うことにある乎？」と。[27]すなわち、方言の研究は音にしたがって本字を求めることが可能となり、これを通して語族が語源の字から変化する軌跡を明らかにすることが可能となる。上に溯って源流を明らかにすることは、すなわちある方言と古代文化との関係を垣間見ることができるようになる。これが学問の動機だとすれば、「冠帶の倫」とは清末の文脈において政治的な意味合いを持つ語彙である。「冠帶の倫」とは、すなわち服制のことであり、転じて教化、禮儀のメタファーとなる。ここから窺えるように、章炳麟の方言研究は、ある程度において彼の「華夷の弁」に基づく民族主義意識に奉仕しているものである。明末の黄宗羲は「髪を髡る令が下されて以来、士が辱められるのを忍ばぬ者は、死に之くのを悔まず。」と述べているように[28]、「衣冠」などの語彙が清において特別の意味を持っているのは、清において服とヘアスタイルを変えざるを得なくなったのは士人にとって大きな屈辱だからである[29]。章炳麟がここで「冠帶の倫」と強調したのは、満州族の異族性を強調したい意図であり，種族革命の言説である。

もし『新方言』が学問的な動機によるものであり、政治的な動機は付随的なものに過ぎないとすれば、『新方言』の付録にある「嶺外三州語」とは学問的意識と政治的意識が融合されたものであると言えよう。客家は主には晋の末、特に唐の中葉から両宋にかけて北方から南方の江西省、福建省、広東省に移民してきた者だと言われる[30]。客家語も最終的に両宋に江西省で成熟しのちに福建と広東省に広がるようになった[31]。たとえ南に遅れて移民してきた客家の場合も、程度こそ違え、南の民族と融合したことが容易に想像される。しかし、このような問題は章炳麟があっさりと無視した。章炳麟の客家語本字研究は「南方」言説の一環として学問と政治の二重の意味を付与させた。章炳麟は次のように言う。

> 広東の惠州、嘉應（現在の梅州）二州は、東に潮州の大阜（大埔の間違い）、豐順が得り、其の民は晋の末より（五）嶺を踰え，海濱において宅むようになった。言語は古を敦び、土着と相ひ能まない。広州の人はこれを客家と謂うが、隘い者は漢種でないと議る。余はかつてその邦人に問いたことがあるが、雅訓旧音は往往にして在るので、これを『新方言』と著した。その後嘉應の溫仲和が次いだ『州志』を得り、「方言」一卷有り、自ら惠（州）、潮（州）の客籍に通じるという。楊恭桓なる者も，嘉應の人であり、『客話本字』を作った。仲和は音韻転変に通じ、その言は覿く

---

[27]『新方言』、『章太炎全集』第7巻、3-4頁。

[28] 黄宗羲「兩異人伝」、『黄宗羲全集』第11冊、杭州：浙江古籍出版社、1993年、53頁。

[29] 趙園『明清之際士大夫研究』北京大学出版社、1999年、308-317頁。

[30]「客家」という用語との研究史については、飯島典子『近代客家社会の形成：自称と他称のはざまで』東京：風響社、2007年、13－20頁を参照されたい。本書は特に経済史の視点から明以後の客家社会の形成を論じた。

[31] たとえば、周振鶴・游汝傑『方言与中国文化』上海人民出版社、1986年、41-42頁。

審かにす。恭桓はやや涼く駁うが、しかし語をみな実録している。二人の言より、おおよそ六十あまりのことばを剌取り、発して正すこと頗るあるを、別に一篇とした。その　語柢が冠帯より出ており、陸梁の鄙倍（南の少数民族の粗野の言葉）の辞が雑じっていないと察した。以て攻める者の心の偏ることを斥けるに足らば、すなわち民族の所有の事を和らげ齊しくすることになる。[32]

秦の頃、江西、湖南、広東、広西の境にある五嶺山脈以南を陸梁地とした。これは『史記·秦始皇本紀』において書かれている[33]、その後陸梁は、南にある野蛮の地という比喩となった。もちろんこれは自文化中心主義的な見方である。楊恭桓の『客話本字』（1907）とは、『広韻』を代表とする中古音系統を基準に、客家方言を考察する詞典であり、溫仲和の『嘉應州志』とは、1898年に出版され、その巻七は章炳麟が依拠した「方言」巻である[34]。ここで章炳麟は客家が中原より来た人々であるので、「冠帯の倫」であることを強調した。その方法論は学術的なものであってもその意図は政治的なものでもある。「民族の所有の事を和らげ齊しくする」ために、章炳麟は客家が「冠帯の倫」に属すという、「南の漢民族の文化的優越感を強調した。これは、「北」にある支配者の非正統性、夷狄性を強調したいからにほかならないである。章炳麟の言説は、今日の観点で見るならば、政治的に必ずしも正確なわけでないことはいうまでもないが、彼の言説を清末の種族革命という文脈に置いて見なければならない。明らかなのは、この時期の章炳麟が少なくとも西洋出自の「種族」言説を利用したことである。ただ章炳麟が「反国家的民族主義者」（anti-state-nationalist）であることも念頭に入れるべきである。「反国家的民族主義者」とは、ただの反満民族主義者であるだけではなく、むしろ理念的なレベルにおいて「民」の立場に立ちながら「民」と国家、「個人」と国家との関係を思考し、国家権力が個人に対する抑圧を警戒する思想家なのである。この点において、近代中国の民族主義者が内憂外患の下において「民族」や「人民」「階級」などの集団的な単位が至高の価値を持っていることはごく自然なことであるが、これらの集団的な価値とそれらに基づく来たるべき近代的な民族国家との関係や、この来るべき国家が含有している個人に対する抑圧に対して、内憂外患の只中にある知識人は必ずしも十分な警戒意識を持っているわけではなく、ないし楽観的な想像すら持っているのである。この点において章炳麟は主流と明らかな違いがある。章炳麟の国家、ないし狭隘なナショナリズムに対する警戒は、その「五無論」（1907）、

[32]『章太炎全集』第7巻、139頁。括弧と中の説明は引用者。

[33] 司馬遷『史記』第1巻、北京：中華書局、2010年、253頁。

[34] 孫畢『章炳麟『新方言』研究』上海：華東師範大学出版社、2006年、4頁。

「国家論」（1907）、「四惑論」（1908）などの論文において明らかに見られる[35]。ここで言いたいのはほかならず革命家章炳麟の国家否定的ナショナリズムの複雑性である。

章炳麟の「嶺外三州語」における客家話本字の研究は、紙幅によりここで例を略すことにする。彼の方言を含む言語文字研究に対する重視は彼の歴史への重視と異なるものではない。それは章炳麟が方言、文字を歴史の重要な構成と見なしているからである。彼の客家語研究は彼の「南方」言説の一環として見られるのも差し支えないのもそのためだからであり、「南方」は常に「歴史」と密接な関係にあるからである。章炳麟が語言文字を歴史の重要な構成として考えるのは、すくなくてもその「呉君遂への手紙」（1902年8月8日）において見られている。章炳麟は章学誠の戴震に対する攻撃を批判しながら、「試みに通史を作って、然る後戴氏の学を知るようになる。万有を彌く侖うに、即ち小学の一端は、其の用もまた専ら六書七音にあるのみならず。（中略）惟だ文字語言は間にその痕跡を留め、これは地中の僵石とともに無形の兩種の大きな史となる。」と[36]。章学誠はその「書『朱陸』篇後」という文章において、戴震が「その史学義例、古文法度において、実に解るところはない」、「空しく義理を説く」と、戴振を罵倒した（『文史通義』所収）。章炳麟が上の言葉を発したのは、章学誠に対する、章炳麟の反論である[37]。

章炳麟の『新方言』における反満種族革命への宣伝という政治的な動機は、附録にある劉師培「後序一」において次のように解読された。

> 抑も東晋以還より胡、羯、氐、羌が中夏（中国）に入り、（黄）河、淮（河）の南北に於いて夷音が雑るようになった。重ねて蒙古と建州（女真族）の乱を以って、風俗が頹れて替り，虜語が横行した。しかし委巷（辺鄙な巷）の談りや婦人、子供の語は転けて故言を保てるようになり、それを失っていない。これがすなわち夏（漢族）の声の僅かに存するものである。昔、欧洲の希臘、伊太利亜諸国が非種に割されたが故に、老い遺民が旧語を保持することによって古を思う念が沛然と生まれ、光復の動がここに蘿蔔るようになった。今諸華（中国）における夷の禍は昔、伊と同じであるので、夷言を革めて夏の声に従わせようとすれば、又た必らずこの書を以て嚆矢となり。此れが則ち太炎の志なり[38]。

劉師培の「解読」は明らかに清末における、明治日本とヨーロッパの影響下にある言語ナショナリズムの言説に影響され、それと中国の伝統的な、自文化中心主義的華夷意識と

---

[35] これらの論文の日本語訳は、章炳麟『章炳麟集：清末の民族革命思想』、西順藏・近藤邦康編訳、岩波書店、1990年より。

[36] 湯志鈞編『章太炎政論選集』上冊、173頁。

[37] 章学誠著・倉修良編注『文史通義新編新注』、浙江古籍出版社、2005年、132頁。

[38]『章太炎全集』第7巻、134-135頁。括弧と中の説明は引用者。

を混合したものである。上述したように、清朝小学の集大成者たる章炳麟にとって方言の研究はまず学問的なものであり、付随的には政治的なものである。だがほかの種族革命者にとってこの付随的な側面こそ意味が大きい。上の劉師培の反満意識に基づく解読も章炳麟本人に歓迎されたはずである。劉師培の解釈によれば、「夏声」とは、上古漢語に関係の密接な中国語であり、東晋以來の「北の声」、すなわち北の遊牧民族侵入者の声によって雑種化された中国語のことである。この政治的な解読はむしろ章炳麟本人の「『新方言』序」においても、『新方言』を読んだものは、農夫であれ、市井のものであれ、自分の方言が古代の周、漢と繋がっているのを知ったことで、故国を如何に悲しむか、と章炳麟が自ら述べている[39]。

Ⅱ　『国粋学報』と「南方」言説：章炳麟との関係

（1）「南方」、批判的「国学」と革命

国学保存会とは、鄧実（1877-1951、枚秋）、黄節（1873-1935、晦聞）が1902年2月23日上海で組織され成立され（鄧実「国学保存会小集序」）、会誌は旬刊『国粋学報』である。『国粋学報』は、編集責任者は鄧実、黄節であり、革命党の学術團体たる国学保存会の機関刊物である性質を有している。『国粋学報』の「国学」とは、清末においてもちろん日本から借用された用語であるが、大雑把に言うならば、『国粋学報』における「国粋」、「国学」の意味は、西洋の学術に対する中国の伝統的な学問を指している。特に周・春秋戦国・秦・漢の学術を指しているニュアンスが強い。そのなかで『国粋学報』は特に儒家中心の伝統とは違う、諸子の学問の復帰を強調した。創刊号の寄稿者に鄧実、章炳麟、劉師培（申叔）、黄節、陳去病（巣南）、馬敘倫がいる。しかし、興味深いのは、『国粋学報』創刊号の執筆者は章炳麟のほかに、ほとんど後述する清末最大の文学結社たる「南社」の発起人でもある点である。1906年の「国学保存会報告」第一号からその運営経費を見ると、国学保存会第一回の特別寄付者は、鄧実が一番目に多く、黄節がその次に多い寄付者であることがわかる[40]。

章炳麟は『国粋学報』の最も主要な寄稿者の一人であり、彼の多くの重要論文は『国粋学報』において発表された。たとえば、前述の章炳麟『新方言』も「章絳」という名前で『国粋学報』第33号から第43号、第49号に連載された。

『国学保存会報告』第6号（1906）にリストされた会員名簿に計19名のメンバーがあり、元の順序で羅列すると、次の通りである（＊は南社に参加していないもの）：広東出身の黄節、鄧実、盧爵勳（＊）；江蘇出身の劉師培、高旭、柳亞子、陳去病、惲毓森、朱少

---

[39]『新方言』、『章太炎全集』第7巻所収、5頁。

[40]『国学保存会報告』第1号、鄧実・黄節主編『国粋学報』、復刻版第6冊所収、2993頁。

屏、沈詠韶、呉欽廉、王鍾麒（*）；浙江出身の諸宗元、馬敘倫（夷初）、陸紹明；広西出身の馬君武；江西出身の文永譽（公達*）、張桂辛(*)、胡素（*）、である[41]。19名の会員のうち、南社の計画と実施に参加したが正式に会員になっていない鄧実と劉師培を入れれば、後に南社メンバーになった国学保存会の会員は全部で12名いる。注意すべきことは、逮捕と亡命を重ねた章炳麟が会員でないことである。

本稿の意図から上から少なくとも二つの解読が可能である。一つは国学保存会の全員のメンバーに濃厚な南方色彩であることである。これは辛亥革命における革命派の南方色彩に合致する。もう一つは、19名の会員のうち、柳亞子（1887-1958，名慰高，号亞盧、人権）、陳去病(1874-1933)、高天梅（1877-1925，高旭、号は劍公）という三名はのちに南社発起人となった。

上の国学保存会の会員リストのうち、劉師培は、南社の発起人であったにもかかわらず、のちに朝廷高官となった。金石学者の端方（1861-1911）のスパイとなったことと、辛亥革命後袁世凱の帝政復帰を支持した「籌安会」に関わったことで、正式に南社の会員になっていない[42]。国学保存会の主な発起人である鄧実も、実際早くも1907年冬に劉師培や黄節とともに、柳亞子、陳去病、高旭の提案のもとで南社発起のための予備討論に参加したが、なぜか鄧実は最終的に入会していない[43]。1908年の国学保存会のメンバーになった畫家黄賓虹（1865-1955，黄質）と蔡哲夫（1879-1941）もともに南社初回の集まり（雅集）に参加した17名のメンバーのうちのふたりであるが、両者とも『国粋学報』の主筆である[44]。そして1907年に南社の創立者の一人である陳去病も上海で国学保存会を運営し『国粋学報』の編集に関わっていた。さらに1910年4月10日に杭州西湖で南社の2回目の集まり（雅集）に参加した馬敘倫（1885-1870）が章炳麟の紹介で同盟会に参加したものであり、彼も『国粋学報』の寄稿者である。また、後に南社の主幹となった胡樸安（1878-1947）も『国粋学報』の編輯のひとりである。1908年の23名の国学保存会会員のうち、後に南社に参加したのは、計16名となっている。上から一つの事実として得られるのは、明らかに南社の早期メンバーと国学保存会のメンバーが相当な程度に重なっていることである。

（2）章炳麟と『国粋学報』

「『蘇報』事件」で逮捕された章炳麟は三年後の一九〇六年六月に釈放され、直ちに孫文に革命の基地である東京に迎えられた。東京で章炳麟は、革命党の同盟会機関誌『民

---

[41] 『国学保存会報告』第6号、同前、3003-3004頁。

[42] 柳亞子『我和南社的関係』、柳無忌編『柳亞子文集・南社記事』所収、上海人民出版社、1983年、3-4頁。

[43] 同上、3頁，10頁。

[44] 同上、13-14頁。

報』を主催するようになった。『民報』第五号の広告部分において『民報』が上海にある『国粋学報』の東京における代理であることがわかる。

章炳麟と『国粋学報』との関係に関して言えば、まず章炳麟の多くの重要論文が『国粋学報』に発表された場所である。『民報』が『国粋学報』の外国における代理店であるように、『国粋学報』は章炳麟が主筆とした『民報』の中国における暗黙の代理店であることも言えなくもない。辛亥革命の若い世代にとって1903年の「『蘇報』事件」で毅然と逮捕されることを進んで選んだ章炳麟と鄒容が政治的に革命のシンボルである。それと似たように、章炳麟はまた学術の面において伝統的な学術の代表的人物とされた。特に『国粋学報』にとって章炳麟は一番尊敬される象徴的な碩学でもある。章炳麟が創刊号から頻繁に論文を掲載し続けてきたことからも窺えるように、章炳麟は実際『国粋学報』の編集者でもなく同人でもないが[45]、『国粋学報』同人にとっての、学問的にも精神的にもリーダーと言っても過言ではない。章炳麟と、『国粋学報』、南社、という三者の関係から言えば、『国粋学報』こそが早期の南社を派生した母体であったとすれば、章炳麟も早期南社と間接的な関係を持つようになったのである。これについて後述したい。

章炳麟の『国粋学報』とその主な編集者たる鄧実に対する評価は、革命成功後の一九一三年四月に章炳麟は鄧実に叙勲をするように申請したことから窺える。章炳麟は、明末における清朝に抵抗した鄭成功（1624-1662）や、王夫之（1619-1692）、顧炎武（1613-1682）などの歴史的人物に叙勲するように呼びかけた。このほか、辛亥革命において亡くなった孫文の同志である楊衢雲（1861-1901）、趙声（1881-1911）などの人物と、当時存命中の革命者にも叙勲するように呼びかけた。その生存者のなかに鄧実が入っている。章炳麟は鄧実の功績を称えて、「『国粋学報』を著し、民族主義を発揮した。革命を鼓吹することは、『民報』と比肩するに足りえる。上海で出版されたがゆえに、明らかに清廷を叱ることができなかったが、然し其の人心に流行る者は至りである。其の同志に黄節がいる。」と言っている[46]。ここで章炳麟が『国粋学報』と東京での同盟会機関紙『民報』を相い並んで論じていることから、『国粋学報』の章炳麟における位置が窺える。

章炳麟の『国粋学報』に対する巨大な学問的政治的影響力は、日本亡命中において「国粋学報社に致す書」（1909年11月2日）という文章からも窺える（『国学保存会報告』第39号）。章炳麟『国粋学報』の編集方針を批判して次のように述べている。

国粋学報社は、そもそも亡りつつあるものを存し、絶えつつあるものを次ぐことを宗とする。しかし旧い説を篤く守ることは、それを光り輝かせ、日に新たにさせることはないので、覧(よ)むものは飽きないわけではない。やや学術のあるものは、自ら（それを）すでに知っていると謂おうが、思想の高く優れ、故常(こじょう)に循(したが)わないものには、範に就かせることはできないであろう。これこそわが党の深く憂えることである。わたしが近頃学子と討論

[45] 同上、15頁。

[46]「臨時稽勲局」に「稽勲意見書二」、湯志鈞編『章太炎政論選集』下冊、643頁。

しているものは、音韻訓詁を基としながら、周・秦諸子を極とし、ほかにまた仏教経典を講ずるを兼ねることである。けだし学問は言語を本質とするが故に、音韵訓詁はその管龠(かんなめ)である。真理を以て歸宿とすれば、ゆえに周秦諸子は其の深い義理である。（中略）漢代学術のなかにまた今文という一派が出て、文(あや)を以て実を掩(おお)い、其の失はすなわちでだらめである。もしふたたび理学を明らかにするならば、これを道德の訓言（即ち倫理学）にすることができるが、真理の帰趣としては足らず。（理学諸家はみな空虚であり、質問に答えられなければ、理解しにくい言葉で強引に結論を出す。）ただ諸子は近人の廃れたのを起こすことができるが、しかし、それを提倡する者は分析を詳しくしようと至ろうとしても、いい加減に筆墨を弄ぼうとしたりする。或いは筋の立たない根拠のない言葉となってしまい、以って相いひけらかせば、すなわち病はこれによって生じてしまう。（中略）貴誌は勉めて増進することを図り、以て国学の源を広めるべし[47]。

ここで章炳麟は『国粋学報』が「存亡継絶」における不足を指摘し、自分の期待を語った。掻い摘んでいうならば、章炳麟から見れば、『国粋学報』が宋明理学の空疏と距離を置くべきであり、「帯に短したすきに長し」という現状を警戒し、中国の学術をリードしてゆくべきだということである。また、章炳麟が「音韻訓詁を基とする」こと、「学問は言語を本質とする」ことを強調したのも、ほかならず、空疎の学問とを区別するための言葉である。また言語的視点から諸子学から義理を求めるべきだという章炳麟の主張は、もちろん宋明理学のような形而上学的な義理を批判するための言葉として理解すべきであるが、義理を求めない考証学への批判でもある。他方、先秦諸子の伝統に戻ることは、古いものを守るというよりも、革新するためのものであるということである。

章炳麟が具体的に批判している『国粋学報』の論文は具体的にどの論文であるかは定かではない。少なくても章炳麟の批判から連想させられるのは、この前年に鄧実とともに主な編集者である黄節は「嶺学源流」（「「広東学術」源流」の意味）という長い社説を『国粋学報』（第 40 号、1908 年）に発表したことである。この論文は詳しく広東学術が如何にして明より以來上に周敦頤（濂溪）、程顥、程頤兄弟に遡り、下って陳白沙（陳獻章，1428-1500）があり、なかには湛若水（1466-1500，甘泉）などの陽明学の重要人物を輩出させ、広東を陽明学重鎮に発展できたことを論じた[48]。この論文で黄節は「嶺学」（嶺南学術の意）という学術史的用語を作った。「嶺学」とは、むろん本稿でいう「南方言説」に当たるが、おそらく黄節が模倣したのは、「閩学」や「徽学」、「皖学」などの学術史的思想史的用語であろう。ちなみに、「閩学」は中国学術史においてすでに特権化された、南宋における朱熹が代表とする福建省出身の朱子学グループである。「徽学」は徽州（現安徽省黄山市、績溪県、及び江西省婺源県）の学術を意味する。また、「皖学」は、清朝の戴震とその弟子筋にあたる江蘇省金壇出身

[47]章炳麟「通訊」、『国学保存会報告』第 39 号、鄧実、黄節主編『国粋学報』、復刻版第 12 冊所収、7489 頁。

[48]鄧実、黄節主編『国粋学報』、復刻版第 9 冊、4479-4492 頁。

の段玉裁、高郵出身の王念孫、王引之など揚州出身の学者群を指す。黄節は決して朱子学徒、陽明学徒ではない。むしろ学術的には章炳麟の影響を受け、章炳麟に近い思想ものである。たしかに広東出身の黄節の東南学術に対する憧れと故郷に対する愛着を表しているかもしれない。しかし、朱子学、陽明学は、この時期における章炳麟の文字訓故を本としながら先秦学術、特に諸子学に対する考えとは無縁のものである。

では、『国粋学報』はどのように章炳麟の批判に反応したのか。『国学保存会報告』第42号において学会名義の文章「国粋学報明年の特色」が掲載された。直接章炳麟の名前が出ていないが、刊行時間と内容から見れば、明らかに章炳麟の批判に答えていることがわかる。

> 今年の第13冊は幸いすでに完成させている。鴻篇を鉅製しているとは謂えないが、国学の粋は悉くここにある。しかし撰述の大旨は、すなわち努めて浮華を避けて朴学（考証学）に趨こうとし、務めて文にその質があり、博くさせながらみな要がある。学術源流に関わり、考古に資するものでなければ、録せず。それでこそ韓愈が「陳い言と惟われるところを務めて去けるなり」と述べている通りである。古物を保存し、故聞を遺れないために、周・秦諸子の書を訓釈して，それらを尽く読めるように、（清の）乾隆・嘉慶時代諸儒の学を引き伸ばして，その緒を絶えないようにする。古代音韻文字の学を明らかにし、それを以って学を求めようとする途とする。古の意味を謹んで守り、先民の訓詁を越えないようにする。五年来この原則を守りながら敢えてこれを越えることはなかった。これが本誌の志であり、天下とともにこれを証明しようとする[49]。

ここで述べられていることは、章炳麟の学問の主張に通じる。厳密な言語学的手法、文献学方法論で古典を解釈することは、清朝考証学的方法論（朴学）であり、章炳麟がその清末における代表である。同時に、古典学術史を歴史家の精神で研究し、古典学の革新をもとめようとする精神もまさに章炳麟の主張でもある。

本稿のテーマである清末の「南方言説」に関して言えば、『国粋学報』も疑いもなくそのような言説の中国国内における最も重要な拠点である。たとえば、南社の主將となった陳去病が『国粋学報』第28号から第36号（1907年）まで『明遺民録』を連載しており、それを通して自分の「遺民」という明のアイデンティティを持ち、清朝の正統性を認めない意識を暗示した。これは同じく『国粋学報』で連載していた黄節の『黄史』のような民族主義的歴史叙述と呼応した。陳去病は「明遺民録敘」「凡例」において、「遺民の心は故国に繋ぐ。衣と冠、暦法は自ら新しい朝と違う。（中略）我々が遺民なる者を拝むことは、その舊君を感激し敬意を抱くことで恥新しい主に奉仕することを恥とするからであ

[49]『国学保存会報告』第42号、鄧実、黄節主編『国粋学報』、復刻版第12冊所収、7495-7496頁。括弧と中の説明は引用者。

る。」と述べている[50]。その矛先は明らかに異民族支配者の満州族清朝に向けている。これは章炳麟が顧炎武（亭林）、王夫之（1619-1692，船山）の遺民意識を高評することに通じるものである。これも1898年の戊戌変法失敗後に一般の知識人が満州族王朝に奉仕することを貶しているためでもある。趙圓も指摘したように、明末清初における「遺民史論」は遺民という自己規定、自己解釈をする際に多く使われるものあり、ある種の象徴を自ら求めることを通して自分を歴史叙述の中に納入しようとする途でもある[51]。これは章炳麟や、『国粋学報』同人、及びに清末の南社の同人の遺民意識にぴったりである。実際一九〇三年に章炳麟と鄒容が逮捕された「『蘇報』事件」以後、革命党の「南方」言説に濃厚な遺民意識が窺われている。この遺民意識は清末においてわりと早く見られたのは章炳麟などの南明史叙述においてであり、さらにそれを続けたのは、『国粋学報』とのちの南社の作品である。

Ⅲ　「南方」言説の典型としての南社
——章炳麟及び『国粋学報』との関係において

（1）修辞の策略としての「南方」と政治実践としての「文学」

清末における「南方」言説の典型を挙げるのに、その名の通り、清末の最大の文学結社である「南社」を超えるものはない。1905年2月に創刊された『国粋学報』と比べて、南社の成立された時間は四年遅れているが、両者の関係は密接なものである。特に同人が重なっている点から言うと、南社は『国粋学報』から派生された文学団体であると言っても過言ではない。そして両者のこのような関係があるがゆえに、南社も章炳麟と直接な関連を持つようになったのである。

ここで南社を創立する前の柳亞子、陳去病などは、若いころ章炳麟の巨大な影響下にある点を指摘しておきたい。章炳麟、『国粋学報』、南社という三者の間における最大の関連は、主に復古精神と反清種族革命との結合にある。しかし、南社の「復古」とは、文学的政治的には明末における反清復明をスローガンとした江南にある文学結社である復社、幾社の伝統回復にほかならない。明末の江南地域を拠点として出発した復社は、最初は純粋な学術的な団体であったが、だんだんと政治的な批判をする、全国的な結社となり、一部の社員は最終的には満州族政権の襲来に対して徹底的に抵抗する態度を取っていた。そして幾社は、復社と似たような性質の結社であるので、のちに復社の一部となった。ただ復社、幾

---

[50]『国粋学報』第3年丁未第28号。鄧実、黄節主編『国粋学報』、復刻版第7冊所収、3243-3244頁。

[51]趙圓『明清之際士大夫研究』、北京大学出版社、1999年、270頁。

社は文学復古を主張し、わりと新しさを求めようとする当時の「公安派」を批判した。南社の「復古」とは、政治的に、文学的に明の「古」を回復し、それを通して自分の文化的政治的アイデンティティを表そうとした。この点において章炳麟と、鄧実や、黄節らの『国粋学報』の「復古」とは、先秦、秦、漢を中心とする学術史への関心がある点や、西洋学術との融合・対抗の意識がある点とは大きな違いがある。したがって章炳麟及び鄧実らと南社との間における関連と断絶を明らかにしようとすることは、この部分の趣旨である。

孫之梅の統計によれば、1911年1月に編集された『南社社友通信』にメンバーが193人あり、最盛期の1916年においては、柳亜子の『南社紀略』における統計では計1170人がある。その中で最も多いのは江蘇省出身437人、浙江省226人、広東省172人、湖南省119人、安徽省54人、福建省23人であり、江蘇、浙江、広東、湖南出身者が約5分の4を占めている[52]。南社の「南方」色彩が如何に濃厚なのかは一目了然である。

南社は最初に企画されたのは1907年であり、正式に成立されたのは1909年11月13日である。活動の中心地は上海である。呼びかけ人は陳去病（巣南）、高旭と柳亜子（亜盧）である。江蘇出身の高旭（1877-1925，字天梅，号剣公、鈍剣）は、1909年10月17日に「南社啟」を辛亥革命の主幹組織である同盟会の会員である于右任（1875－1964）によって創辦された『民籲日報』を発表した。文章において、

> 『楽』が曰う。「南音を操り、其の舊を忘れず」と。（中略）「南」とは、本社を東南において提唱する謂いなり。「率土之濱，莫非王臣」（大空の下に王土でない土地はなく、地の果て（浜辺）まで王臣でない人間はいない）。もともと南北の区別もないが、わざわざその始まりを記すために言うにすぎない。（中略）今ぶしつけながら、陳巣南、柳亜盧とともに南社を結び、前代結社の積弊を洗いなおそうとする[53]。

と述べている。主幹社員のひとりである寧調元（字太一，1873-1913）も「『南社集』序」において次のように述べている。

> 吾友高旭、柳亞盧などはすでに詩詞を以って海内に知られており、また南社を創った。以って當世の騒人奇士の作を網羅し、盛観を呈している。鍾儀（しょうぎ）は南音を操ることは本を忘れないことなり[54]。

高旭、寧調元の上の二つの序から南社の趣旨が窺える。まず、高、寧二氏が引用した「操

---

[52]孫之梅『南社研究』、北京：人民文学出版社、2003年，50-60頁。

[53]『国民日日報』1903年8月23日。括弧は引用者。

[54]『南社叢刻』第一巻、江蘇広陵古籍刻印社、1996年、139-140頁。

南音不忘其舊」、「鍾儀操南音，不忘本也」は、『左伝』に典拠がある。楚の鐘儀とは、鄭から晋に献上された俘虜である。晋景公の前で琴を与えられると、南方の冠を付けている鐘儀は淡々と南方の音楽を演奏したストーリである。鐘儀が出自を大事にするのは仁、以前のことを忘れえぬのは信、私心なきは忠と言われたからである(『左伝』成公九年紀元前 582 年)[55]。寧調元は湖南出身であり、まさに楚人である。ここで「南音」とは南方の音樂を指しているだけでなく、宋において呉方言、閩方言、楚方言なども「南音」と呼ばれている[56]。これらの方言、特に江蘇南部である呉音とは、南社の主なメンバーと密接な関係にある。ここからも南社同人のアイデンティティが窺える。これはもちろん南社メンバーの満州支配者による明の亡国に対する恨みと直結している。南社メンバーの革命に対する態度がはっきりとここに表れている。次に、「文学」にこれほどの高い政治的な期待を与えた点も、南社の特徴である。

政治的に見れば、南社の最初の集まり（「雅集」）の 17 名のなかで、14 名が同盟会会員である[57]。3 回目の集まりの 19 名のなかで、発起者 3 名以外、雷鉄厓（1873-1920）は孫文の秘書をし、辛亥革命の宣伝家でもある。范鴻仙（1882-1914 光啟）は革命時期に「鐵血軍」司令を担当しており、後に袁世凱（1859－1916）によって暗殺された。林白水（林獬，1874-1926）ものちに軍閥張宗昌によって暗殺された。張佚凡（別名林宗雪，字逸凡）は辛亥革命後に女子北伐隊隊長をしていた[58]。

中国文学史的に見れば、南社は明末崇禎 2 年（1629 年）に成立された、江南の文学結社である復社、幾社の復古的文学伝統を継承し、政治的に復、幾両社の名士が死を以って清を反抗する節操を強調しようとした。むろんそれは清末における反満活動のためである。近代中国の革命文学史的側面から見れば、南社の革命文学・民族主義文学の実践ほど規模の大きいものはほかにない。純文学の面から見れば、留日学生による『湖北学生界』、『浙江潮』、『江蘇』などが近代中国革命文学の濫觴である、と倉田貞美は指摘している[59]。南社はこれらの革命文学の積澱をベースにしながらさらに集中的に大規模な展開として見なされることができよう。

このように南社を革命文学の歴史として見る場合、1930 年代の左翼革命文学と比べれば、次のような違いが指摘できる。まず、1930 年代の革命文学は、魯迅によって代表される個人的な左翼文学であり、党派的な集団的意志に基づく、「無産階級革命文学」を提唱する中国左翼作家連盟（「左連」）がある。それと比べて、南社は伝統的な結社的色彩を持っている文学結社であり、個人による結社の色彩が強い。早期南社の主なメンバーが政治的に支持する

---

[55]小倉芳彦訳『春秋左氏伝』中巻、東京：岩波書店、2004 年 10 月、69－70 頁。

[56]李新奎『中古音』、13 頁。

[57]柳亞子『我和南社的関係』、前掲書、3 頁、11-14 頁。

[58]同上、22 頁。

[59]倉田貞美『清末民初を中心とした中国近代詩の研究』、435 頁。

同盟会が近代的政党と異なるのは、同盟会は伝統的な結社であるという点である、という点である[60]。次に、1930年代の左翼文学は文化的に伝統の文化を否定することを主張し、政治的に倫理的に農村と民衆と結合し、民衆を解放することを旨とした。これは文化的に必然的にある種の民俗性、民衆性、通俗性を一つの価値として強調した。これは中国の白話文運動（中国文脈の言文一致運動）の背景の一つでもある。これはむろん左翼文学の大衆動員の政治的主張に呼応するものでもあり、ある種のロマン的色彩のものでもある。それと比べて、南社はむしろ「文」の伝統を継続させる自覚を持っている。これは彼らの明の文学結社である復社、幾社に対する思いから窺える。南社のメンバーは政治的に復社、幾社に見られた遺民意識を模倣し、反満清政府という新しい文脈において明の文学結社伝統を再演出する意欲を持っていた。さらに、1930年代の左翼文学はマルクス主義に基づく階級意識を持ちながら、国際主義との協調関係にある民族主義をスローガンとして持っている（これ逆説に国際主義的ナショナリズム」と呼べるかもしれない）。それと比べて南社のナショナリズムは20世紀初頭に西洋において始まり、世界各地で氾濫されるナショナリズムの言説の一環として見ることができる（これはたとえば19世紀末頃にある「種族」などの概念からも窺える。ただ、南社のナショナリズムは『春秋』華夷意識という自文化中心意識にも関わっている。この意味において1930年代の左翼文学と対立している政府系の国民党系の文学も違うのである。この系統の文学は民族主義を標榜するため、民族主義文学とも呼ばれている。最後に、三十年代の革命文学は線的目的論的支配の元にある。線的目的論史観とは、歴史を直線的に発展し、歴史の過程がある終局的な目的によって規範されている、という史観である。この目的論的史観に対して、南社の革命文学はある程度進化論の影響を受けてはいるが、1930年代の左翼文学と比べて、直線性史観は南社において相対的に明らかではない。

他方、今日の復社、幾社を自認する南社は、実際近代的な色彩がないわけではない。南社同人は文言固定詩という古い形式を通してそれを革命を宣伝するユニークなマス・メディアに仕立てた。そもそも文言詩は応酬往來という公共的性質がある。南社の時代に至ると、近代出版資本主義が確立する過程で印刷技術が発達し、南社という文学結社も明の復社、幾社と異なる公共性を一層持つにいたったのである。

（2）章炳麟と柳亞子との間の関連

ここで南社の一番重要な存在である柳亞子と章炳麟との関係に触れ、章炳麟の南社に対する影響を明らかにしたい。これは章炳麟の辛亥革命の若い世代に対する影響を明らかにすることにほかならない。

まず章炳麟と柳亞子との間に直接的な師弟関係があることを断わっておきたい。柳亞子が南社を回顧する『南社紀略』において触れているが、柳亜子が一九零三年春に、親友で

---

[60]伝統結社と近代革命との結合について、孫江『近代中国の革命と秘密結社：中国革命の社会史的研究（一八九五～一九五五）』（東京：汲古書院、2007）、「序言」を参照されたい。

後に南社の創立者の一人となる陳去病（巣南）とともに、同郷の金鶴望の紹介で中国教育会会員となり、上海で愛国学社に入社し、そこで章炳麟などと知り合った[61]。金鶴望（金松岑，1873-1947）は章炳麟の友人であり、清末小説『孽海花』の作者でもある。章炳麟などの革命の先達が柳亜子に与えた大きな影響は、柳亞子の『自撰年譜』から窺える。1903年17歳の時に愛国学社に入社し、章炳麟、鄒容、蔡元培（孑民）、呉稚暉諸先生と知り合い「始めて革命の宗旨を確立した」と述べた通りである[62]。章炳麟は早くも「『蘇報』事件」が起こる前の1903年5月に,愛国学社の学生である陶亞魂と柳亞子当ての手紙において自分が昔この二人の学生の昔と同じく皇帝を保てながらの改良を主張していたが、14歳、15歳頃から革命を主張するようになったと語り、改良は革命に至る前までの一つの過程であると強調した[63]。柳亜子などが改良の主張者から革命の主張者になった過程には、その背景に章炳麟の強い影響があることがここからも窺えよう。

早くも1920年に弱冠16歳の柳亞子が「亞廬」という筆名で、「鄭成功伝」を書き、1903年に日本で刊行される留学生の雑誌『江蘇』に中国から投稿し、掲載された[64]。この文章において柳亜子は鄭成功を種族革命の英雄として高く称えた[65]。柳亞子は鄭成功を「遺民」の典型として称揚したばけでなく、新しい時代に来たるべき英雄としても謳歌した。彼の歴史叙述にある「遺民」と「英雄」という二重のモチーフは章炳麟や、国粋学報』、南社の歴史叙述と一貫している。この文章が刊行された際に、章炳麟がすでに「『蘇報』事件」によって6月30日に逮捕され[66]、章炳麟は1903年10月に獄中にいて《江蘇》で柳亞子の文章を読み、「進歩の早いこと、これが極点に達した」と、元の教え子に手紙を書いて激賞した（手紙は『復報』第五號＜1906年8月25日＞に刊行された[67]）。

章炳麟と鄒容が逮捕された「『蘇報』事件」は、柳亞子のような世代の若者に莫大な影響を与えた。これは柳亞子の『自撰年譜』においてはっきりと書かれている[68]。柳亞子はその自伝『五十七年』においても、章炳麟、鄒容が入獄されたあとに柳亞子が見舞いに行

---

[61]柳亞子『南社紀略』、前掲柳無忌編『柳亞子文集· 南社紀略』、9-10頁。

[62]『自撰年譜』、柳無忌・柳無非編『柳亞子文集· 自伝· 年譜· 日記』、上海人民出版社、1986年，10頁。

[63]「致陶亞魂、柳亞廬書」、朱維錚・姜義華編注『章太炎選集』上海人民出版社、1981年、149頁。

[64]中国革命博物館・上海人民出版社編『柳亞子文集· 磨劍室文録』上冊、上海人民出版社、1987年、5頁、14頁。

[65]同前、5頁。

[66]湯志鈞『章太炎年譜長編：1868-1918年』上巻、169頁。

[67]章炳麟「致柳亞廬書」、『章太炎政論選集』上冊、249頁。

[68]『自撰年譜』、前掲柳無忌・柳無非編『柳亞子文集・自伝・年譜・日記』、9頁。

った[69]。『自撰年譜』によれば、1906年に章炳麟が出所し、孫文の代表が章炳麟を日本へ迎えた際に柳亜子も見送りに来た、とも述べている[70]。

前述したように、初期南社は国学保存会と3分の2のメンバーが重なっており、密接な関係にある。このため初期南社が『国粋学報』によって派生した文学団体だと言っても過言ではない。これは、南社も章炳麟と直接的な関連を持つようになった、と言っている理由である。もし1903年が中国革命の転換の年であるとすれば、この転換を徹底させたのは、日露戦争の爆発であろう。日露戦争(1904年2月-1905年9月)は、中国の士人に国内政治のレベルにおいて清政府の軟弱無能を認識させることができた。国際政治のレベルにおいては「球籍」（地球の籍）を除名されるという心配と焦りは、日露戦争爆発によっていっそう強くなった。章炳麟、鄒容が逮捕されている間に世界も中国も大きな変化を迎えた。これらの変化が柳亞子などの辛亥世代が革命にシフトした外部的コンテクストとなった。1905年に創立された『国粋学報』もこのような時代雰囲気の中から生み出された。南社は学術史に重点を置いた『国粋学報』の文学領域における延長であり、革命の潮がますます激しくなっていることの表れでもある。1903年という革命の転換は、その象徴的な表れの一つは、鄒容、章炳麟によって表された、文字を以て革命を鼓吹することを特徴とする「文の革命」である。従来の辛亥革命研究は武昌蜂起などの武装闘争に集中しており、章炳麟などの文の実践または「文」の革命としての巨大な効果に対する研究が無視される傾向があるが、言葉を武器とする「文の革命」は新しい世代」に対してその影響が深いことをここで改めて強調しておきたい。

（3）章炳麟と柳亞子の間の断絶

前節で章炳麟の柳亞子に対する大きな影響について述べてきたが、最後に章炳麟と柳亜子との間にある断絶についても明らかにしたい。これを手掛かりに章炳麟と早期の南社メンバーとの関連と断絶、さらには辛亥世代の一部との関連と断絶とを見てみたい。

まず、前述した通り、柳亞子が政治的に章炳麟、鄒容から莫大な影響を受けている。しかし、文学的に見れば柳亞子及びほかの多くの早期南社のメンバーはむしろ梁啟超、黄遵憲（公度、1848－1905）などの文学改良の影響を受けている。これについて、柳亞子が「舊詩と新詩を創作することに対する感想」（1933年6月）において次のように回顧している。16歳の年に『新民叢報』における梁啓超の『飲冰室詩話』と『詩界潮音集』を読み、心において詩学革命があるようになり、昔書いたものに火を付けて焼いてしまった。（中略）梁啟超と龔自珍は当時の私にとって頭の中の二つの偶像であると言ってもよい。しかし、『国民報』が排満を主張し、保皇を反対し、『大陸報』も康（有為）、梁の私徳を攻撃したので、我の信仰心が徐々に動揺しはじめた。十七歳で上海の愛国学社で勉強した際に章

[69]柳亞子『五十七年』、前掲柳無忌・柳無非編『柳亞子文集・自伝・年譜・日記』、152頁。
[70]同上、10頁。

炳麟、鄒威丹と知り合い、これをきっかけに梁氏を反対するようになったが、彼の詩に対して今になってなお好きなものが幾つもある[71]。

上の回顧から窺えるように、柳亞子は若い頃文学的に梁啟超の詩界革命に影響されたが、のちに梁啟超の政治改良の主張に違和感を感じるため、文学的に梁氏に対する共鳴を自己抑圧した。にもかかわらず、柳亞子の文学における梁啟超、黄遵憲の影響は、南社の詩歌において西洋からの出典や、たまに見る口語的表現などからも窺える。袁進が指摘したように、柳亞子を体表とする南社の同人は、梁啟超の「詩界革命」と南社が標榜する復古主義を一身に集めた。「詩界革命」の主張者によく見られるような西洋からの出典や、「旧いスタイルを持ちながら新しい境地を含む」というような改良の主張などは彼らの作品に明らかに見られて「詩界革命」の探索は主に南社において現れていると言っても過言ではないぐらいである[72]。

この時期の「詩界革命」という梁啓超の文学改良主張は、ひとり柳亞子においてのみ見られるものではない。早期の南社の多くのメンバーの作品の特徴の一つでもある。この共通な特徴は彼らの「復古」と『国粋学報』の「復古」との間の違いを説明できる。たとえば、高旭（鈍劍）は「世界は日に新しいので、文界詩界は新しい天地を作るべきである。これは一定の公例なり。黄公度の詩は独り異境を開き、まさに中国詩界のコロンブスなり」と述べ、「詩文は復古を貴び、これは固より疑うことのできないものである。復古なるものは、「神」（精神、精髄）が似ているにあり、形が似ているにあらず。（中略）故に詩界革命とは、復古の美称なり」と述べている[73]。

民国が成立されてから満州族政権がなくなり、清末にあった滔々たる「南方」言説も「北方」が消えたことで歴史となった。章炳麟の柳亞子に対する影響（または柳亞子の章炳麟に対する評価）も大きな変化を見せた。すくなくとも我々が 1925 年 5 月 11 日に新しい南社のメンバーである任夢癡の手紙において、章炳麟に対する批判すら見えている。柳亜子は、「章炳麟のようなものは、偏狭的な民族主義の主張者であり、滿洲さえ排除できれば、民族主義を実現できるとばかり思っている。しかし、孫先生の民族主義は＜国内諸民族の一律平等を主張した（だから蒙古自治を許容した）。中国民族は世界で独立し自由になろうとした（だから帝国主義を打倒し，不平等條約を廃除することを主張した）＞と呼びかけた。それは狭隘的な民族主義を主張する人が理解できるものか」と、章炳麟を批判した[74]。ここからも柳亞子の章炳麟に対する理解の単純さが見える。なぜならば、柳亞子がおそらく章炳麟の主著である『斉物論釈』などに見える、来たるべき国家主義に対する猛烈な批判や、多元主義的文化に対する強い主張などを明らかに知らないからである。恐らくこのような単純さは多くの

---

[71]中国革命博物館、上海人民出版社編『柳亞子文集・磨劍室文録』下冊、1144 頁。

[72]袁進『中国文学的近代変革』桂林：広西師大出版社、2006 年、205-206 頁。

[73]高旭（鈍劍）「願无盡齋詩話」、『南社叢刻』第 1 巻、37 頁、39 頁、41 頁。

[74]『柳亞子文集・書信集録』上海人民出版社、1985 年、55 頁。

辛亥革命青年によって共有されているかもしれない。そもそも章炳麟の難解な文章は若者にとって読みづらいものであった。

そして、1924年に共産党員の加入を認める改組（国民党改組）が行われ、「連ソ・容共・扶助農工」の政策が出されると、章炳麟は国民党と共産党をともに批判するようになった。章炳麟の共産党に対する批判はすくなくとも共産党成立四周年の時に見られている。同時にこの時彼の批判はソビエトソ連と中国共産党と協力する政策を取っている国民党にも向けていた。彼によれば、共産党も国民党も「ロシア人の勢力を借りて、わが中華民族を圧迫するものである」と見た[75]。国民党左派の柳亞子の章炳麟的批判は章の孫文批判と関わっているかどうか定かではない。後者に関して、たとえば、章炳麟が1928年10月21日の演説において「孫中山のちの三民主義とは連外主義、党治主義、民がろくに生活できない主義である。今日の中国の民が命に堪えられないのは，蔣介石、馮玉祥が最大の元凶ではなく、孫中山こそ張本人である。彼ら現在党を以て国を治めるとは、党の主義によって国を治めるのではなく、党員を以て国を治めるのである。それは国民の政権を奪いながら、中華民国名義で外部者に向けているに過ぎない。」と批判した。そしてそれは本質的には「一つの党が皇帝になる」ことを意味していると批判した。[76]ここで章炳麟は国権、党権と民権の三者の間の対立を鋭く指摘した。1カ月後の1928年11月24日に上海特別市党務指導委員会第58回常務委員会で、「反動分子章太炎を指名手配すると申請する案」を可決した[77]。ここでかつて孫文、黄興と共に「辛亥革命三尊」の一人として尊敬されている章炳麟は、明らかに党の敵となった。柳亞子の章炳麟の国民党批判に対してどのような態度を持っているかは定かではない。しかし、孫文の忠実な追随者としての柳亞子は、おそらく章炳麟の過激な態度に賛成するはずはないであろう。ここから確実に推測できるのは、このときの柳亞子と章炳麟との間に明らかに大きな距離があることである。

史料から確実に言えるのは、白話文運動を批判してきた柳亞子が少なくとも1924年以後から文学的に新文学（白話文文学・言文一致の文学）を賛同するようになったことである。たとえば、1924年6月16日に新しい南社のメンバーで、国民党政府立法委員である文友呂天民（呂志伊，字旭初）当ての手紙に呂の口語の新詩批判に異議を唱え、そして手紙のなかで当時の国民党中央監察院委員である友人張継（字は溥泉）が白話文を反対することに対して批判的であった[78]。この態度は三十年代になるといっそう明らかになった。たとえば1935年12月の「上海中国語ラテン化研究会」によって発起された「われわれの横組みの新文字に対す

[75]たとえば、「我們最後的責任」（1925年10月31日）、章念馳編訂『章炳麟演講集』上海人民出版社、2011年、293頁。

[76]「在招商局輪船公司股東会上的演説」、章念馳編訂『章炳麟演講集』、296頁。

[77]「市指委会五十八次常会」『申報』、1928年11月25日。前掲湯志鈞『章太炎年譜長編』下冊（巻5），899頁による。

[78]「致呂天民」『柳亞子文集·書信集録』、上海人民出版社、1985年、51-52頁。

る意見」という文章において柳亞子は蔡元培、孫科（1891-1973）、魯迅、郭沫若（1892-1978）、陳望道（1891-1977）などとともに、重要な署名者の一人となった[79]。「新文字」とは、ラテン化された漢字（音）である。これは恐らく当時の日中戦争のための大衆動員とおそらく関係がある。しかし、もともと国学保存会のメンバーであった柳亞子のことを思えば、いささか意外な変化であるかもしれない。他方、これはごく自然な変化でもあるとも言える。早期南社の同人は復社、幾社の明末伝統にアイデンティファイするが、同時に西方によって代表される「世界」に熱烈に参入しようとするものでもある。この「世界」の主流はアルファベットの文字によって構成された。そもそも柳亜子などの早期南社同人の「復古」とは限界のある「復古」である。かれらの「復古」とは政治的なレベルのものであり、ほかならず「復明」であるからである。かれらの「南方性」もこのようなレベルのものである。ここからも章炳麟や、『国粋学報』の鄧実、黄節らとの大きな違い又は断絶が見られる箇所である（文字訓詁の面において造詣の深い胡樸安のような南社メンバーの例外もあろうが）。

第一次世界大戦が中国知識人に与えた大きな影響の一つは、ある種の国際化のために新しいナショナルなアイデンティティを構築することである[80]。まさに徐国琦が指摘したように「民族主義的国際主義（nationalist internationalism）」と「国際主義的民族主義(internationalist nationalism)」は国際的流れに乗ろうとする中国のナショナリズムの新しいアイデンティティとなったのである[81]。新しい時代の雰囲気のなかで、「国粋」、「復古」は二次的なものとなった。ここから章炳麟のような思想家と、国学保存会のような思想的学問的運動の運命を容易く想像することができる。すなわち「国学」、「復古」などの言説は、もはや若者のアイデンティティの内容でなくなった。その代わりに新しいアイデンティティの内容となったのは、西洋文明により容易く近づくことのできるような「新文学」またはそれに基づく白話文，ないしラテン化された「漢字（音）」である。言文一致の理想を具現した白話文とラテン化された新文字は、「近代」、「世界」、「文明」などの新しい価値により簡単に繋けられるからである。初期南社世代の民族主義になお見られた夷夏意識は、むろんこのときにすでにすっかりなくなっている。口語化され、西洋化された文体などが意味しているのは、中国がさらに進んで西洋が軍事的に文化的に主導する世界システムに組み込まれた、ということと中国が進んで世界システムに組み込まれようとしていることの二面性である。この矛盾した二面性によって「近代」と文化的自己植民化との間にはジレンマが発生するようになった。「南方」及びその対極にある「北方」のようなキーワードは、世界を説明するのに不十分となったのは益々明らかであった。1919 年の「五四運動」あたりになると、章炳麟の弟子たち、

---

[79]倪海曙『中国拼音文字運動史簡編』上海：時代書報出版社、1948 年 6 月、139-141 頁

[80]徐国琦『中国与大戦：尋求新的国家認同与国際化』（Xu Guoqi, *China and the Great War: China's Pursuit of a New National Identity and Internationalization*, Cambridge University Press, 2005）、馬建標訳、上海：三聯書店、2008 年。

[81]徐国琦、同上、58-64 頁。

たとえば魯迅や、銭玄同（1887－1939）などが次々に章炳麟のもとを去ってゆくのは、中国の伝統文明と決別することにほかならない。弟子のなかで周作人のように、この伝統と決別しようとしながらも、つかず離れずの距離を保たざるを得ないものもいる。柳亞子などの辛亥革命青年も徐々に章炳麟を敬して遠ざけるようになるので、ましてや「五四」世代の青年たちが章炳麟のもとを去るのは無理からぬことであった。

結びにかえて：「南方」言説の継続

総じて言えば、清末の「南方」言説は、まず一つの空間概念である。国内政治のレベルから見れば、それは「北方」の朝廷に対抗するための装置である。清末の「南方」は時間的概念でもある。それは「南明」、「歴史」、「伝統文明」、「遺民」などのニュアンスを有するものである。また「南方」言説は、グローバルな空間における空間配置の実践でもある。このグローバルな空間とは、もちろん十九世紀における最初のグローバルな資本主義的、植民主義的文脈における空間でもある。清末の「南方」がこのような空間配置の実践によって表われたのは文化的学術的な面における「西洋」との差異でもある。この意味において、「南方」という空間は、ナショナルな空間の隠喩でもある。もし「南方」言説が辛亥革命の原動力とも言われる地方の力と呼応するならば[82]，清末の「南方」言説が実際はナショナルなものである以上、その地方性は擬似的で人工的な地方性にすぎない[83]。このようなナショナルなスペースは清末の「国学」言説においても直接的に確認でき、南社の詩文などの言説においても直接的間接的に見られる。「南方」とは、『国粋学報』の「学術」や南社の「文（学）」と同様に、ある種の動詞的語彙ともなる。すなわち「文」の実践であり、「文」の行動である。同時にこのような実践や行動を可能たらしめたのは、ある種の過去の時間であり、すなわちある種の中国の歴史的叙述である。このような政治的な時間性(temporality)の高揚は西洋から君臨した普遍化された西洋の時間とある種の緊張関係にあるものである。この意味において「南方」とは空間化されただけでなく、時間化された概念となる。「南方」がある種の政治的実践となりえたのは、「文」と「学術」において再構築されたからであり、出版資本主義との結合において言語的公共空間を構築し、それを通して政治意識、政治過程に影響したからである。

---

[82]故溝口雄三氏は、辛亥革命が地方の力こそ原動力であると指摘した。溝口雄三「辛亥革命の歴史的個性」、『思想』2006年9号（総第989号）、東京：岩波書店。

[83]このような擬似的な地方性についてはたとえば清朝末期民国初年の「広東文化」言説の構築においても見られている。この地方性とは、ほかならずナショナルな言説の一環にすぎないからである。清朝末期民国初年の「広東文化」言説の構築については、程美宝『地域文化与国家認同：晩清以來「広東文化」観的形成』、北京：生活・讀書・新知三聯書店、2006年。

「類似の南方」言説はある程度まで明末清初における遺民政治文化に遡ることができる。明末清初の顧炎武（1613-1682）、黄宗羲、王夫之などは、このような遺民系譜にある種の範例を提供する。「南方」言説に関して言えば、明末清初において王夫之、黄宗会（1618-1663, 字澤望，號縮齋）などのような最も激しい南北論がある。彼らは清朝政権に対する反抗の気持ちを地域的な概念で「夷／夏—南／北」論として表した[84]。明末清初の「南方」言説もある種の文化的なアイデンティティと政治的なアイデンティティの表現と実践である。趙圓の指摘によれば、それは明末清初の遺民の「自己のイメージの制作」でもある[85]。清末のマス・メディアの空間において、このような文化的政治的アイデンティティ公共空間で表現することは、高度に政治性を持っている。章炳麟の辛亥革命青年に対する影響の一つはまさにここにある。秦春燕が気が付いたように、1936年6月14日に章炳麟が逝去した際に、章炳麟が中心メンバーであった『制言』半月刊第20至26号において、章炳麟を追悼するたくさんの対聯のなかで最も人の注目を引いたのは、30幅近くの対聯が章炳麟を明朝の遺民と相並べて論じていることである[86]。章炳麟の思想的豊かさから見ればこのようなイメージはある種の単一さ、単純さを感じられるが、しかし、この単一な単純な「章炳麟」像こそ恐らく辛亥革命の若い世代の心の中の「章炳麟」であろう。おそらく章炳麟の辛亥革命の若い世代へのもっとも大きな影響は、彼の学問とそれによって表された政治的思想ではなく、明末の遺民に繋がる「章炳麟」イメージであったのであろう。

（りん・しょうよう　東京大学）

*後記：本稿は香港特別行政区研究助成局（Research Grants Council）の研究助成を受けた[Project No. 140511, CityU 9041691]。

[84]趙圓『明清之際士大夫研究』北京大学出版社、1999年、90頁。

[85]同上、256頁。

[86]秦春燕『清末民初的晩明想像』北京大学出版社、2008年、103頁。

【要旨】

Zhang Taiyan and the Late Qing Discourse on "South China"

LIN Shaoyang

This paper examines Zhang Taiyan's role in the discourse on "southern China" which started in the late Qing. The focus of the paper is comparing Zhang's influence on young readers who had different perceptions of him as a revolutionary leader. In particular, this comparison provides an angle to gauge Zhang's fading influence on the new young modernist generation in the 1930s. For Zhang', "the south" refers to both his philological studies on the Southern Chinese dialects on the basis of the Qing's Evidential School and his historical narratives on the Ming loyalist resistance against the Manchu conquest in southern China. In both cases, Zhang expresses his political standpoint as an anti-Manchu revolutionary. Furthermore, this paper also analyses Zhang's influence on *Guocui xuebao* (*The Journal of National Essence*) in Shanghai, an important scholarly and political stronghold for the revolutionaries to reconstruct the Chinese scholarly tradition by emphasizing non-Confucian classics in a global context in the late Qing. Lastly, this paper sheds lights on Zhang's shifting influences on *Nanshe* or The Southern Society, the largest literary and revolutionary organization in southern China during the late Qing period. As a whole, this paper attempts to position the late Qing revolutionaries' cultural nationalism within both the Chinese own historical tradition and a globalized context.